

成仏できない!?

第一経営経済研究部長 龍野 栄作

最近、銀行や不良債権問題をテーマとする本を書店で見かける機会が増えた。一つの売れ筋なのだと思うが、なかでも、銀行OBが書いた本、金融を得意分野とするライターが書いている本は、現実の動きを捉え迫力のあるものが多い。

こういう書き出しで一冊の本を取り上げると、まるで本の広告のようである。しかし、話の都合上必要なので、臆面もなく紹介させていただく。

「成仏できない」(「メガバンクの誤算」、中公新書)。金融の本を、こうした言葉で始める人も珍しい。しかし、著者の箭内昇氏が、元日本長期信用銀行のエリート行員(企画室長)であったことを知ると、やや納得がいく。また、銀行の不良債権問題は約十年が経過し、未だ解決への明確な道筋が見えてこない。この問題に直接・間接に関わった人は膨大な数に及び、この種の意識、考えを持っている人も少なくないことと思う。

個人的な話で恐縮だが、以前、北海道拓殖銀行から出向で来ていたA君と一緒に仕事をする機会を得た。明るく有能な彼と「お元気で」と言って別れて一年後、拓銀は破綻する。銀行に戻っているはずのA君のことを案じるとともに、銀行や金融システムとは何か、改めて考えさせられる機会

となった。その後、中小規模の破綻も生じた。4年前、大阪勤務時に関西エリアの銀行を訪問したが、そのうち数行は、既にその歴史の幕を閉じている。

銀行も一つの企業体であり、破綻自体特別なこととは言えない。海外では、80年代以降米国、韓国などで金融システム不安や個別銀行の経営危機が生じた。ただ、これらの国では、危機発生から回復・安定の段階まで数年であった。いまだに不良債権額が増加し続け、また、(こうした時期には一般的である)経済不況を改善遅れの理由とする日本には、厳しい目が向けられている。

9月30日には、新たな布陣で小泉内閣が再スタートし、不良債権問題の解決が、重要懸案事項とされている。「今度こそ」というところであるが、問題解決の成否は、正しい事実認識を多くの人が共有できるか否かが重要なポイントの一つであろう。その意味で、金融の実務経験者や研究者の発言、提言が、事態の改善に大いに役立つものと思われる。何はともあれ、早く問題を「成仏」させないと、季節はずれの「幽霊」がでてくることになる。